

「一流になりなさい。それには、一流だと思い込むことだ」という本からです  
世の中はびっくり現象をみればわかる。どうだ、すごいだろう！

そのトマトの樹は、一万三千個の赤い実をつけて、私の目の前に凜と立っていました。間違いなく強く優しい意志をもって、息づいていました。あの光景が、世の中の深さや、真実、面白さを教えてくれたのだと思います。生まれてはじめて接する“びっくり現象”に、心底感動したのです。「佐藤君、面白いものを見にいこう。松屋の山中鎖さん(当時社長)もくるから、篠山まで走ってください」入社 1 年目の冬。何だろうと考えながら、国道 176 号線を北へと上っていました。後部座席に座った船井先生と山中さんは、楽しそうにいまから見るであろう不思議な、船井先生の言う面白いものの話をしています。トマトが一本の木(?)に、一万個も実るのだよ。生命の素晴らしさとはすごいものだとか、話をしています。少し緊張しながら運転する私には、なんのことも、チンプンカンプンでした。だいたい、トマトの木って何だ!! 一万個って何の話だ!! 佐藤君も楽しみだね……。ハア……。そんな合の手を入れるうちに、夕闇の迫る篠山へと入っていきました。目指すは、協和株式会社篠山農場。そもそも、協和株式会社は、プラスチック成形工場のはずなのですが。ヘッドライトの先に、鶴のように気品のある老年の紳士が浮かび上がりました。協和の野澤重雄さん(当時社長)でした。「ハイポニカという農法でな。植物の本当の力を引き出す農法だよ」大きなビニールハウスのなか、トマトの巨木が、堂々と一万三千個の真っ赤な実をつけて立っていました。枝回りは、10 メートル以上はあります。私の常識では、それはトマトではないと、頭のなかでグルグル回りながらささやいてました。「世の中はね、びっくり現象を見ればわかるんだ。どうだ佐藤君すごいだろう!!」ホルモンか、特殊な培養液で育てるに違いない。いや、種子に対する遺伝子操作か何かかな? 「いえ、これが本当のトマトの姿なんです。水気耕栽培法がハイポニカですが、種子には一定の酸素と水、そして普通の肥液しか与えません」水気耕栽培、そのブランド名がハイポニカ。ハイポニカによって栽培されると、種子のもつ本当の力が引き出される。このトマトは、芽が出て三ヶ月目です、そう説明してくれる野澤さんが、不思議な老人に見えてきました。「このトマトの樹は、どの程度まで大きくなるものですか?」小柄な山中鎖さんが、強い声で尋ねました。「どこまでも成長します。しかし、地球上では引力の関係がありますから、枝回り 30 メートルが現在の限界でしょう」「宇宙空間では?」「一定の環境が保たれれば、どこまでも成長します。それが、植物の力です」また、頭がくるくる回りだした。まるで、ジャックと豆の木だ。「世の中には不思議も奇跡もないのだよ。すべてには理由があり原因がある。ハイポニカもそう。でもね、見ないとわからない」そう。見ないとわからない。いや観ないとわからないのだなと、思いました。「植物には土が必要だと思っているでしょう。土が、植物にとって最善の環境では決してないのです。土の重量、重力が、実は種の成長を阻害することになります」なんとなく理解できたような気はしていた。横に立つ山中さんが、私の耳元でつぶやいてくれました。「最適と思っている環境や、慣れ親しんだ環境が、その人間の成長をいつか阻害することも、確かにあるんだよ」そうだね。船井先生が山中さんを振り返って笑顔で応えました。「どんな環境がその人間に最適かはわからない。だから、いろいろと環境を変えて、もっとも成長する環境を見つけてあげないと」一番いけないのは、固定観念で決めつけることだよ。二人の会話は、続いていきました。確かに、びっくり現象のなかに、私たちの知らない本質があるのだと考えていました。人間は常識や日常経験、知識という先入観で物事を見ています。その結果、本質が目の前に提示されても、その先入観で処理しようとします。でも、トマトの木は、厳然と目の前にあって、それまでのあのトマトのひょうひょうとした木は、虐げられ抑制されたものだと教えてくれています。先入観、常識や知識の浅さや怖さを感じながら、トマトの木の前に立ち続けていました。

びっくり現象の中に何があると言っていますか?

( )